小沼先生の想い出

小林弘人

小沼先生が本校に専任教授として赴任されたのは，昭和52年４月である。その年は，本学科の長年の願望であった大学院博士課程の設置が，文部省により認可された時でもあった。したがって，先生には大学院と学部の講義等をご担当して頂き，さらに，北海道教養部にも集中講義で出講をお願いした。しかしながら，非常勤講師としては，すでに昭和45年４月から，学部の社会保障論（現在の社会保障概論）と公的扶助論をご担当されていた。

私が先生ととくに親しくお付き合いさせて頂くようになったのは，先生が大学院の社会学専攻主任をされて二期目，私が留学ボケも少しさめて学科主任の大役をおおせつかった時からである。それまでも学科運営等についての意見交換をしてはいたが，さらに一歩踏みこんでのお付き合いは，お互いに遠慮していたようである。

学問論，会議の運営，人の生き方，趣味などの意見交換を通じての私の小沼先生に対する感想の１・２を以下思いつくまゝ述べてみたい。

学問については，研究者としては当然のことではあるが，自己の立場を明確に打ち出されるが，他説を全く受け入れないというのではなかった。また，大学院の入試問題をご一緒に作成したこともあるが，試験問題に使用されている用語が，学会で認知されていないような文言の使用がなされた場合は，きびしい態度をとられることがしばしばであった。

会議では，会議が始まる前に議題について実現可能な事柄と不可能（困難）な事柄をご自身で確認され，とくに重要な問題については，積極的に意見を述

べられたが，その意見の基礎となる理由は必ず明らかにされていた。また，会議の運営上あまり関係のない事柄が主張されると，ぴしゃりとそれを封じてしまわれる発言をされ，何度かこの手法によって，私は助けていただいたものである。

先生は，学生時代からスポーツを愛好（とくに，バスケット・水泳・テニス）されていたためか，身にふりかゝった火の粉は，勝敗に関係なく，それを正面から受けとめて，対処されるという筋を通すことを非常に重視されていたようである。たとえば，あるときの大学院の委員長選挙のときに，当初はご自身全くその気はなく，いわゆる日本的根まわしと称するような行為などは全くされなかったのであるが，たまたま先生が委員長候補者の２人の内の１人として，決選投票になったとき，「名前が挙がっている以上途中で辞退することはできない，勝敗は明らかであるが最後までやる」とおっしゃって，ご自身もご自分の名を記入されて，決選投票に臨まれたことがあった。これなどは，先生のご性格がよく現われていると私は思ったものである。

まじめで一見とっつきにくい感じを受ける先生ではあったが，小人数で話をされることは大変お好きのようであった。お酒はほとんど口にされなかったが，興がのってくると，若い頃や満鉄時代の話などもされたが，昨今の酒席にはつきものの「カラオケ」等による歌をうたうことに対しては拒絶反応を示され，「私には，歌をうたわせないで下さい。」というのが酒席が始まる前の先生の口ぐせでもあった。

本来ならば，今年の５月には，ロンドンその他北欧諸国への在外研究にご出発される予定であったが，この場合でも，先生位の年配になられれば，「遊学」をする人が一般的であると思うのであるが，先生は若い研究者と同じような気持で準備され，私がその計画書を拝見させて頂いたときなどは，もう少し息抜きの場を作られた方がよいのではないかと思う程の研究一辺倒の計画書であった。

このように，先生は非常にこの海外での社会福祉学の研究を楽しみにされていたし，私たちにとっても，成果とそのご教授を期待していたのであるが，かえ

すがえすも残念である。

学問としての社会福祉学の発展に情熱を燃されていた先生を突然失った私どもにとっては筆舌に尽し難いショックを受けたのであるが，その中で，わずかな救いがあるとすれば，先生の古稀を祝して公刊された古稀記念論集（残念ながら私は留学中のためお手伝いできなかった）の発刊と一昨年秋に本学で小沼正教授を準備委員長・大会委員長として，日本社会福祉学会を開催し，成功裏に終らせたことである。

私は，先生の亡くなられた直後お宅にお伺いしたとき，奥様のおっしゃった言葉が今でも耳に残っている。それは，「良人としては 120 点をあげてよい人であった」という言葉である。先生が，奥様やご家族の方々に対する日頃の思いやりがうかがい知れて，私は非常な感激をおぼえたものである。

福祉に対する風当りの強い中で，先生が研究され，提言された課題を，いかに継承し，発展させていくかが残された私たちに課せられていると思うが，私も微力ながら，何とかその一端を担っていきたいと拙い文を継りながら確認した次第である。

先生のご冥福をお祈りいたします。

昭和61年 1 月31日